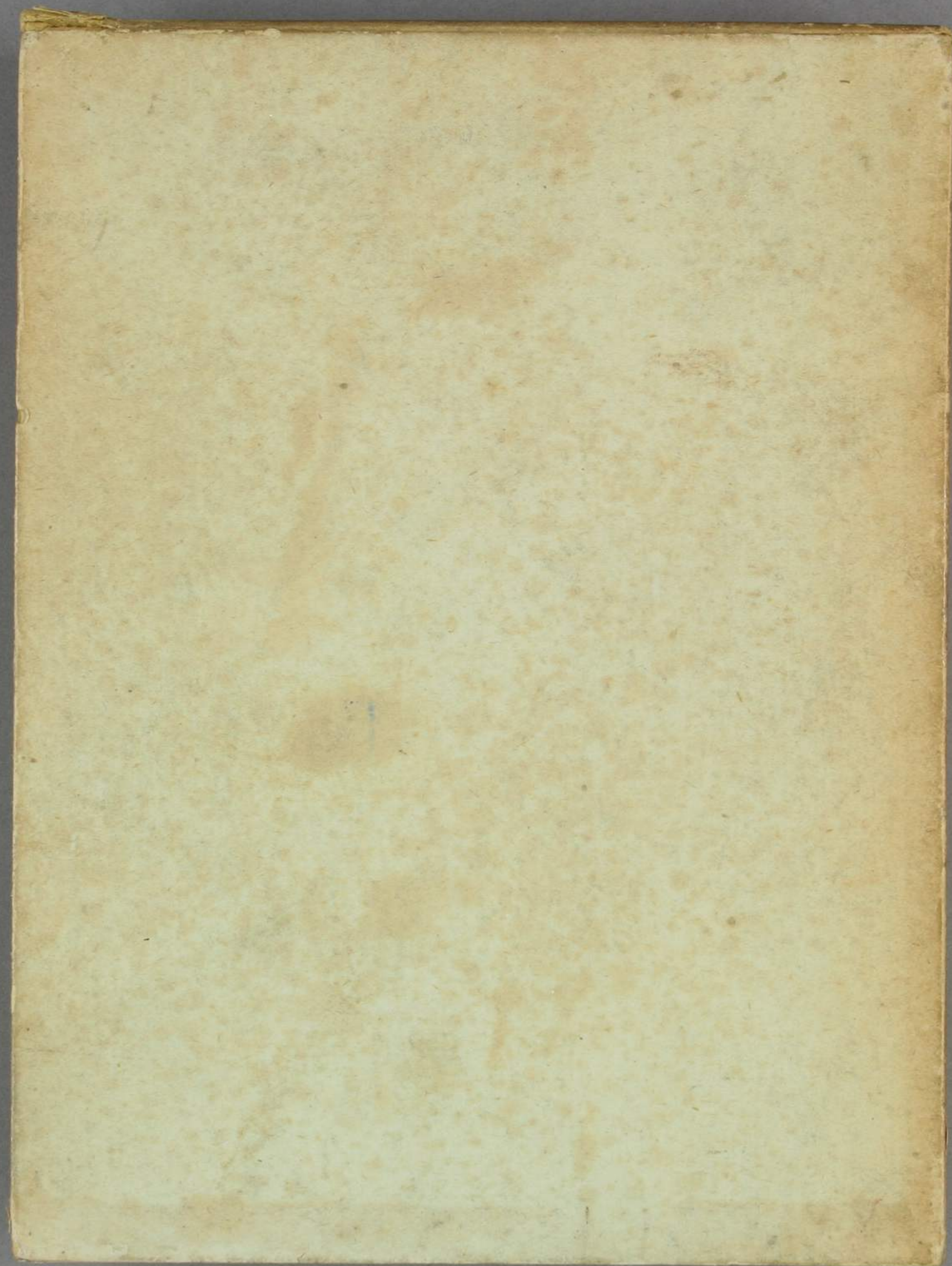


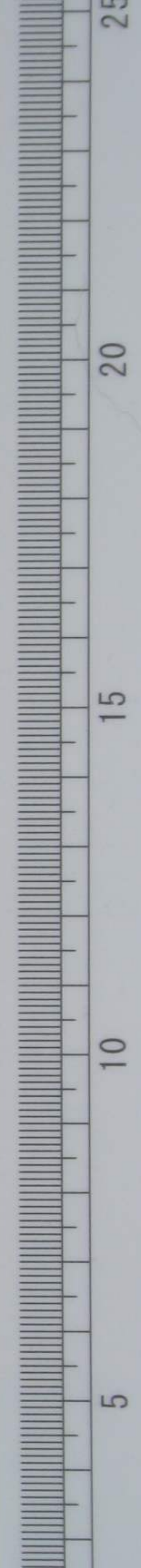
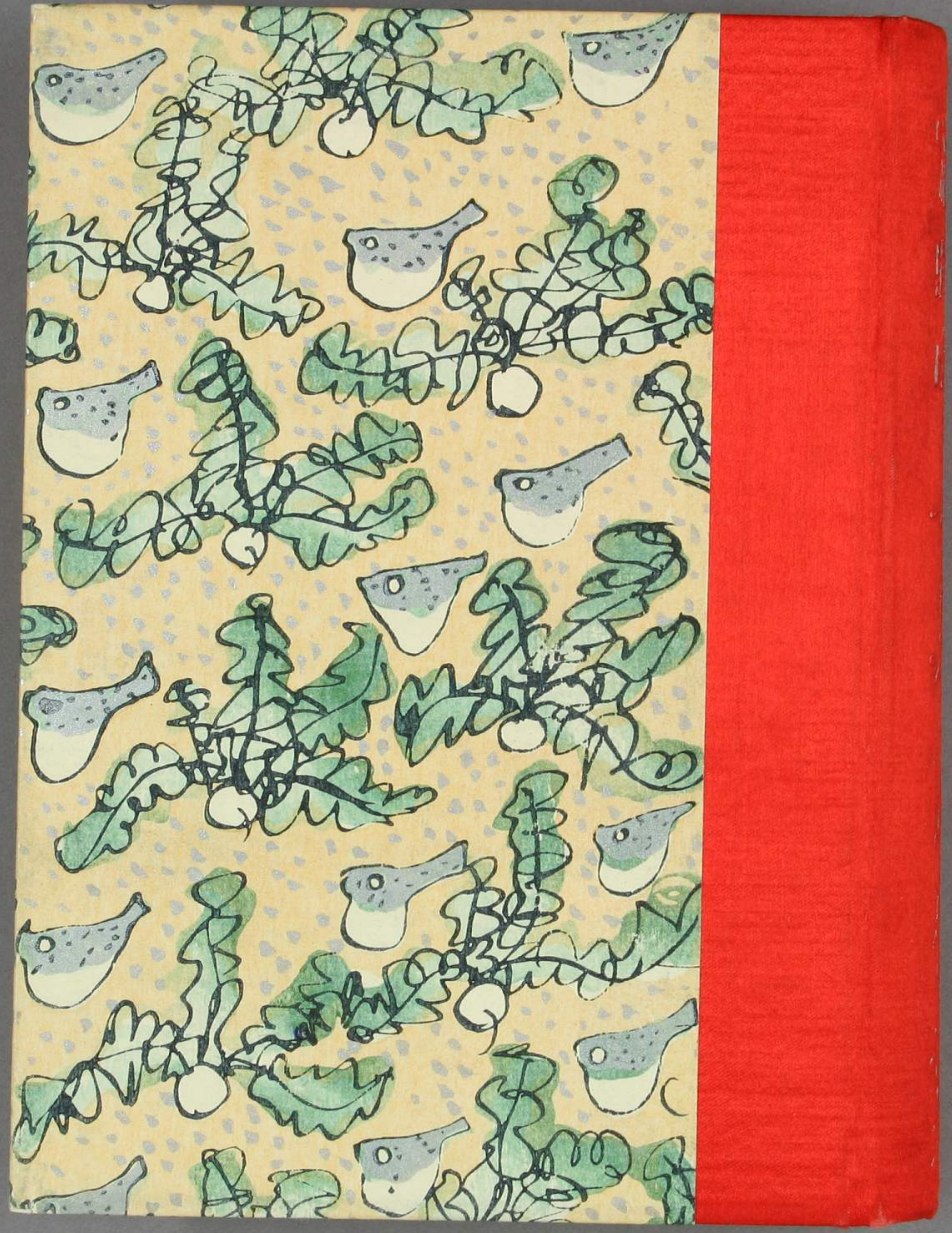
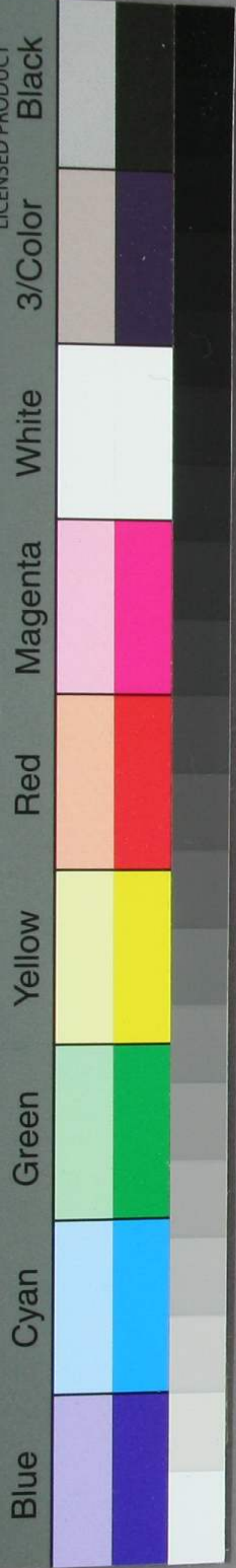


朱強

雲母集

北平女社著及画

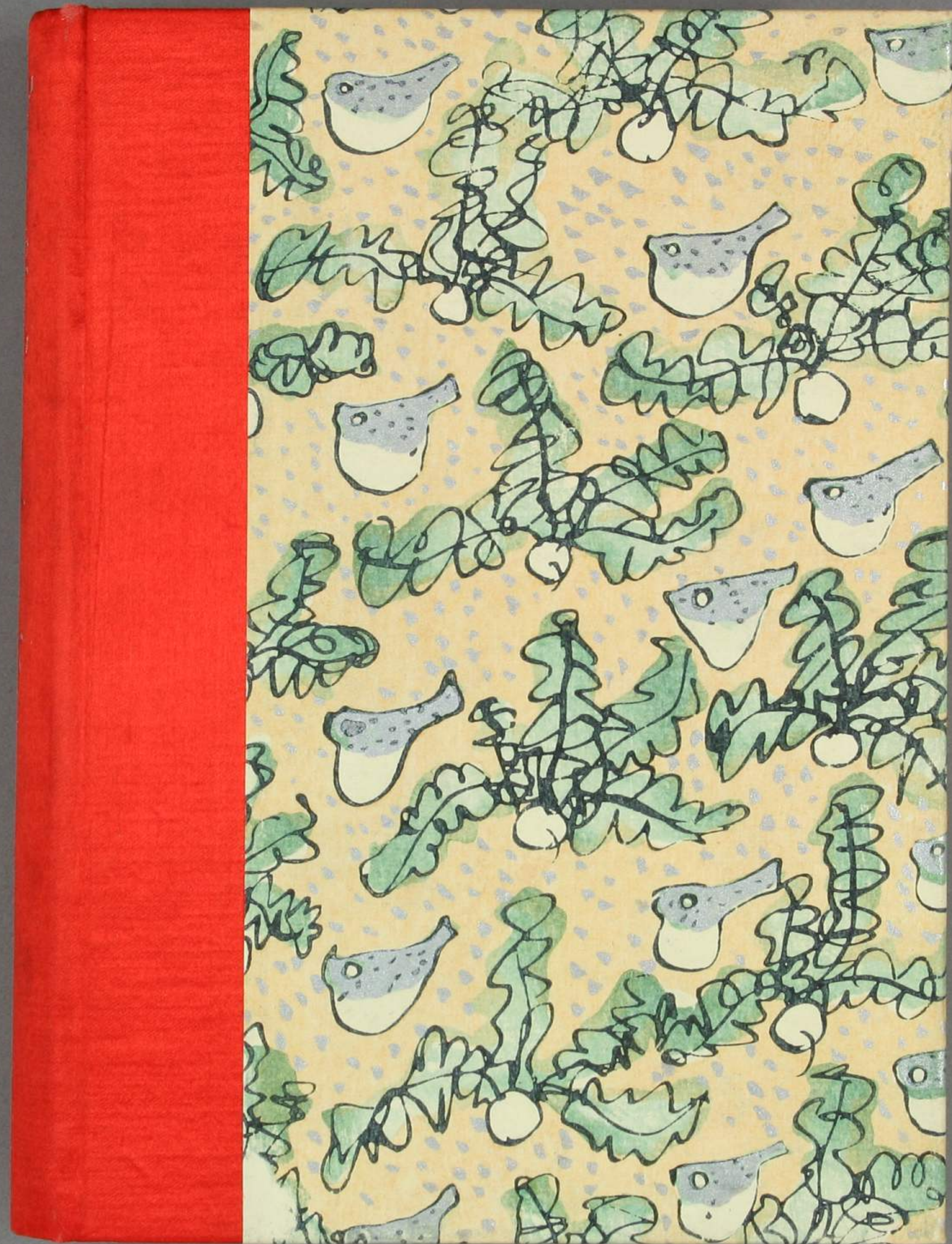


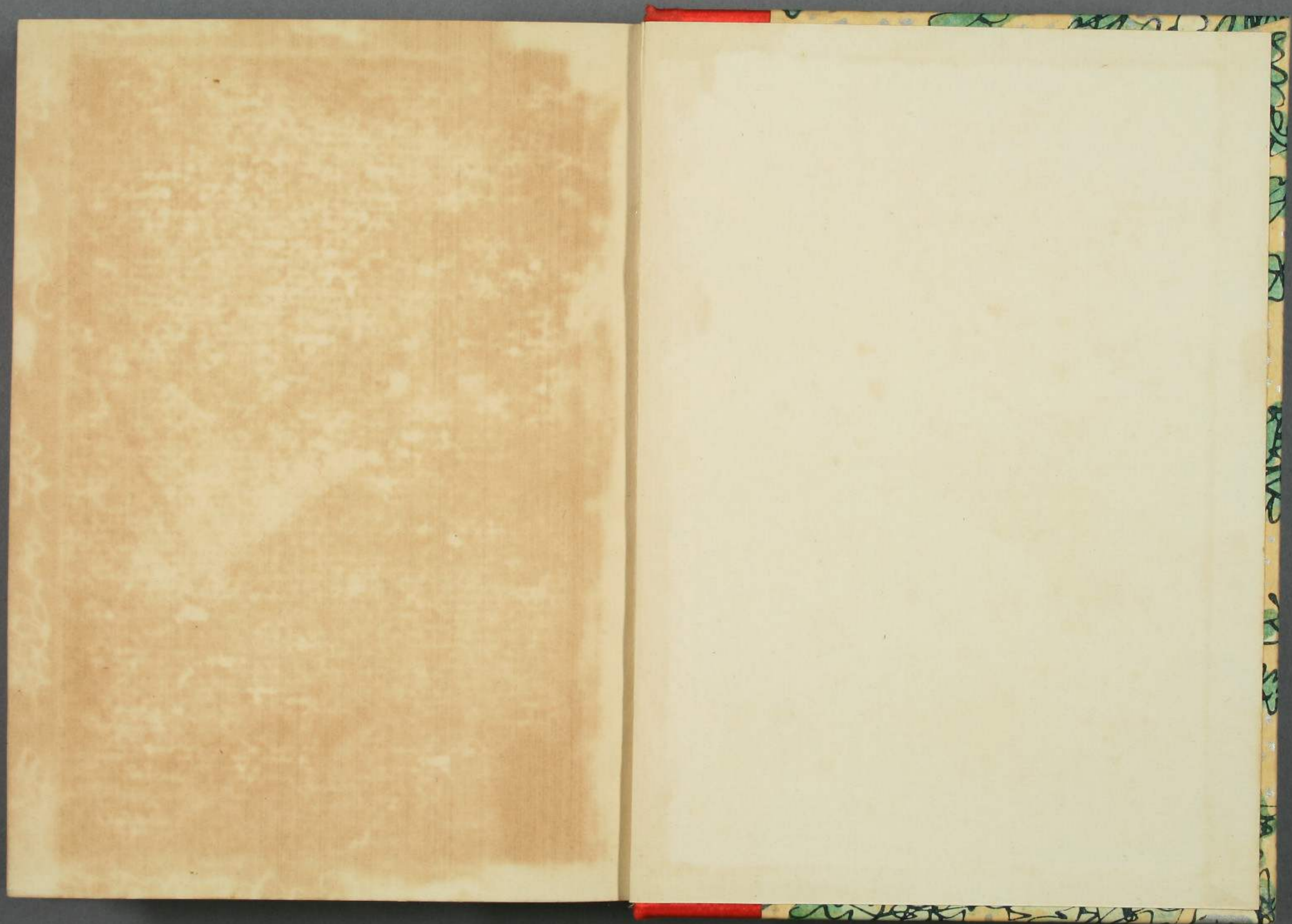




欽定
雲玄母集

北齊庾信撰





雲
母
集
歌
集

雲母集

歌 集



北原白秋著

東京・阿蘭陀書房

さらら。雲母。うんも。玉のたぐひにて、五色の
ひかりあり。深山の石の間オクヤマ イシ アヒダにいでくるものにて、紙カミを
かさねたるごとくかさなりあひて、剥はげば、よくはが
れて、うすく、紙カミのやうになれども、火ヒにいれてもや
けず。水ミヅにいれてもぬるゝことなし。和名和名、岐良々（雲母）

雲母集目次

新 生

力一首	三
卯三首	四
大鴉七首	六
犬二首	一〇
魚介三品三首	二二
穴一首	二四

I

II

薔薇一首……………一五
雲一首……………一六

流離抄

三崎哀傷歌二十四首……………一九
大川端五首……………二六
枯草ぐるま五首……………三九

三崎新居

三崎新居一首……………四五
新生二首……………四六

雲母雲

不盡抄四首……………四
同じくある時五首……………五一
五月二首……………五四
ある時十二首……………五
生きの身五首……………三

III

水垂三首……………六
崖の上の歡語九首……………七
深淵五首……………七
尊榮八首……………九

IV

眼鏡橋十首……………八四
 白日逍遙七首……………九〇
 城ヶ島九首……………九四
 海外の濱三首……………九九
 菖蒲園五首……………一〇一
 遊ヶ崎遊泳五首……………一〇四

山海經

狐のかみそり九首……………一〇九
 海光十九首……………一一四
 赤硝子七首……………一二四

自然靜觀

寂しき日九首……………一二六
 鰻九首……………一三三
 海底五首……………一三八
 海峡の夕焼七首……………一四一
 城ヶ島の落日三首……………一四五
 良夜三首……………一四七
 深夜一首……………一四九
 漣十一首……………一五三
 舟一首……………一五九

V

VI

滂の雨七首……………二六〇
 薔薇静観九首……………二六四
 急須と茶碗十首……………二六九

地面と野菜

地面と野菜九首……………二七
 投網うちの歸途三首……………二八二
 晝休憩九首……………二八四
 泥豚十九首……………二八九
 丘の立秋五首……………二九九
 犬の小便五首……………三〇一

秋高し二首……………三〇五

深夜抄

黍畑七首……………三〇九
 猫のうぶごゑ四首……………三二三
 闇夜六首……………三二六
 黒き花瓶三首……………三三〇
 二本の棕櫚五首……………三三三

臨海秋景

水邊の午後十三首……………三七

VII

VIII

銀ながし九首……………二三四

二町谷小景七首……………二三九

山中秋景十一首……………二四三

漁村晚景九首……………二四九

油壺晚景五首……………二五四

法悦三品

種蒔五首……………二五九

金柑の木十五首……………二六二

一、巡禮……………二六二

二、農人……………二六六

三、秋風……………二六八

四、静坐抄……………二七〇

遠樹抄十一首……………二七二

閻魔の反射

閻魔の反射十五首……………二八一

畑打人形七首……………二八九

曼珠沙華抄五首……………二九三

田舎道七首……………二九七

人參の髯一首……………三〇一

木がらし七首……………三〇二

IX

大椿抄七首……………三〇六
 風吹く椿七首……………三〇〇
 赤き鳥居五首……………三二七

見桃寺抄

西日抄九首……………三二九
 隣の厨十首……………三三四
 渚の西日四首……………三三〇
 童子抄八首……………三三三
 雪夜七首……………三三八
 雪後八首……………三四二

馬の灸五首……………三四七
 不盡の雪三首……………三五二
 龍膽抄七首……………三五四
 三崎遺抄……………三五八

繪畫

KIRARA-SYU 函畫

燕と河豚 表紙

地面と野菜 一七

水村晩秋 二五

閻魔の反射 二六

麗日 三三

新
生

序
歌

力

煌々くわうくわうと光りて動く山ひとつ押し傾かたむけて來くる
力はも

卵

煌々くらぐらと光りて深き巢のなかは卵ばかりつ
まりけるかも

大きな手があらはれて晝深し上から卵を
つかみけるかも

かなしきは春晝の上どころがれる七面鳥の
卵なりけり

大鴉

大鴉一羽渚に黙もふかしうしろにうごく漣の
列

大鴉一羽地に下り晝深しそれを眺めてまた
一羽來し

晝渚人し見えねば大鴉はつたりと雌めすを壓おさへ
ぬるかも

大鴉渚^{なぎさ}歩^{あひ}けど麗^{うら}らなる波^{なみ}はそこまでとどかさりけり

寂^{じやく}光^{くわう}の濱^{はま}に群^{ぐん}れゐる大鴉^{たいあ}その眞^ま上^{うへ}にまた一羽^{いちう}來^きし

一羽^{いちう}飛^とび二羽^{にう}飛^とび三羽^{さんう}飛^とび四羽^{しう}飛^とび五羽^{ごう}飛^とび大鴉^{たいあ}いちどに飛^とびにけるかも

大空^{たいくう}の下^{もと}にしまし伏^ふしたり病鴉^{やみがし}生^なきて飛^とび立つ最後^{さいご}に一羽^{いちう}

犬

水の面に白きむく犬姿うつし口には燃ゆる
紅の肉

丸木橋の上と下とを眞白きもの煌々として
通りけるかも

魚介三品

水の面に光ひそまり晝深しぬつと海龜息吹
きにたり

日ざかりは巖を動かす海蛆もぱつたりと息
をひそめけるかも

鱧ふかばは大地だいちの上は歩あるかねばそこにごろりとこ
ろがりにけり

穴

ふかぶかと眼まなこひらけばどん底に何か光りて
 渦巻くらしも

薔
薇

盤石ばんせきに押し伏せられし薔薇ばげいの花石をはねの
 け照深てるふかみかも

流離抄

雲

大空に何も無ければ入道雲むくりむくりと
湧きにけるかも

三崎哀傷歌

大正二年一月二日、哀傷のあまりただひとり海
を越えて三崎に渡る。淹留旬日、幸に命ありてひ
とまづ都に歸る。これわが流離のはじめなり。

前夜

雪深しく黙もみるたれば紅くの月げいで方かたとなり
けるかな

河口

思おもひきや霧きりの晴は間まのみをつくし光ひかりりゆらめ
く河下見れば

朝霧にかぎり知られぬみをつくしかぎりも
知らぬ戀もするかな

朝霧に光りゆらめくみをつくしいまだ死な
むと吾が思はなくに

三崎真福寺

日だまりに光りゆらめく黄薔薇くわうしやうびゆすり動か
してゐる鳥のあり

黄薔薇くわんせうび光りゆらめくとも知らず雀飛び居り
ゆらめきつつも

二町谷

寂しさに濱へ出でて見れば波ばかりうねりく
ねれりあきらめられず
寂しさに男三人濱に出いて三人そろうてあき
らめられず

八景原

海^あ人^まが子が潜^{ひそ}り漕^こぎたみみるめ刈^きるここの
漣^{なみ}かぎり知られず

八景原の崖に揺れ揺るかづらの葉かづら日
に照るあきらめられず

小牛ゐて薊^{あざ}食^はみ居^ゐり八景原小牛かはゆしあ
きらめられず

来て見ればけふもかがやくしろがねの沖邊
はるかにゆく蒸汽ふかのあり

日が照る海がかがやく鰯船いさなふね板子いたごたたけりあ
きらめられず

八景原はつげん春の光は極みなし涙ながして寝ころ
びて居る

あまつさへ日は麗らかに枯草くそうのふかき匂ひ
もひもじきかなや

日の光ひたと聲せずなりにけり何事か沖に
事あるらしや

ただひとつ紅あかき日の玉くるくると沖にかが
やくあきらめられず

空赤く海また赤し八景原はっけげんなかのとんがり山
なぜ黒いぞな

雲雀啼く浦の廓くわくの田圃たんぼみち行けばさびしも
まだ日は暮れず

華魁ヶ濱

何かしら笑ひ泣きする心なり野菜畑に鰯こ
ろがる

來て見れば鰯ころがる燕畑かぐらばた燕みどりの葉を
ひるがへす

城ヶ島

日暮るれば枯草山の枯草をただかきわけて
いそぐなりけり

夕されば涙こぼるる城ヶ島人間ひとり居ら
ざりにけり

歸途

おめおめと生きながらへてくれなるの山の
椿に身を凭せにけり

大川端

夕暮の餘光のもとをうち案じ空馬車馭して
ゆく馭者のあり

屋根の太陽は赤く濼おどみて石だたみ古るき歩ほ
道だうに暮れ落ちにけり

夕されば大川端に立つ煙重く傾むく風吹か
むとす

悲しくも思かたむけいつとなくながれのき
しをたどるなりけり

風寒く夕日黄ばめり冬の水いま街裏を逆押
してゆく

枯草ぐるま

夕さればひとりぼつちの杉の樹に日はえん
えんと燃えてけるかも

あかあかと枯草ぐるまゆるやかに夕日の野
 邊を軋きしむなりけり

悲しともなくてなつかしかがやかに夕日に
 かへる枯草ぐるま

道のべの道陸神だうりくじんよあかあかと日照り隈くまなし
 道陸神よ

日は暮れぬ人間ものの誰知らぬふかき恐怖おそれ
 に牛吼えてゆく

三崎新居

三崎新居

大正二年四月下浣、家をあげて三崎向ヶ崎に移る。

恍惚とよろめきわたるわだつうみの鱗の宮
のほとりにぞ居る

新生

水あさぎ空ひろびろし吾が父よここは牢獄ひと
にあらざりにけり

深みどり海はろばろし吾が母よここは牢獄ひと
にあらざりにけり

不盡抄

不盡の山れいろうとしてひさかたの天の一
方におはしけるかも

ほがらかに天に迂りあがる不盡の山われを
忘れてわがふり仰ぐ

わがこころ麗らかなれば不盡の山けふ朗ら
かに見ゆるものかも

不盡ふじんの山麗うららかなればわがこころ朗らかに
なりて眺め惚れて居る

同じく

ある時

父母ふぼと海にうち出でめづらかに浮世がたり
を吾がするものか

不盡^{ふじん}見ると父母^{かそいふ}のせてかつをぶね大きな
櫓^{りゆう}をわが押しにけり

垂乳^{たらしち}根^ねのせちに見むといふ不盡^{ふじん}の山いま大
空^{そら}にあらはれにけり

大方^{おほいかた}にうれしきものを不盡^{ふじん}の山わが家^やのそ
らに見えにけるかも

大きなる櫓^{りゆう}権^{けん}かついで不盡^{ふじん}の山眺^{なが}め見^みわた
す男^{おとこ}なりけり

五月

魚さかなかつぎ丘かみにのぼれば馬鈴薯じゃがいもの紫の花いま
盛りなり

れいろうと不盡ふじんの高嶺たかねのあらはれて馬鈴薯じゃがいも
畑はたの紫の花

ある時は

ある時は眼まなこひきあけ驚くと鮮あざやかなる薔薇らばい
の花買ひにけり

ある時は命さびしみ新らしき蠣かきの酢蠣かきを作
らせにけり

ある時は大地だいちの匂ふんぷんとにほふキヤベ
ツの玉もぎて居り

ある時は獨ひと行くとしてはつたりと朱の断面に
行き遇あひにたり

ある時は巢藁代へむとせしかどもその巢に
卵たまごのうまれてありけり

ある時は赤々と日のそそぎやまぬ首くび縊くりの
家を見み恍ぼれてゐたり

ある時は何も思はず路のべの赤馬あかの尻毛しつぽに
手てを觸ふれてゐつ

ある時は遠眼鏡もて度ましくあそぶ千鳥を
凝視めてあるも

ある時は小さき花瓶の側面にしみじみと日
の飛び去るを見つ

ある時はおのが家内を盗人のごとく足音を
ぬすみてあるも

ある時は誰知るまいと思ひのほか人が山か
ら此方向いてある

ある時はただ専念ひとむきに一匹の大鯛釣ると坐り
たりけり

生きの身

生きの身の吾が身いとしみ牛の乳ちちまだきに
起きてまづ吸ひにけり

生きの身の吾が身いとしも鯛釣るとけふも

岬の尖端とつばなに出で

生きの身の吾が身いとしくもぎたての青豌豆

豆の飯いひたかせけり

麪めんを買ひ紅薔薇べにばらの花もらひたり爽やかな
るかも両手りやうてに持てば

生きの身の吾が身いとしみしくしくと腐れ

鮑あはひを日に干しにけり

雲母雲

水垂

水垂みづたれの岩の峽はざまを垂る水の蕭々せうせうとして眞晝な
りけり

水垂の松のかげゆくあはれなり麗らなる日
のべら釣り小舟をぶね

城ヶ島の白百合の花大きければ仰ぎてぞあ
らむあそびの舟は

崖の上の歡語

大きなる匍ひ下り松の枝の上漣かがやき鳥
ひとつある

海雀つらつらあたまそろへたり光り消えた
り漣見れば

この憎き男たらしがつつじの花ゆすり動か
していつまで泣くぞ

深潭しんたんの崖の上なる紅躑躅あかづつじ二人ばかり照ら
しけるかも

恐ろしき淵のまはりを海雀光り列つらなめ飛び
居りあはれ

かき抱けば本望安堵の笑ひこゑ立てて目つ
ぶるわが妻なれば

歸命頂禮この時遙か海雀光りめぐると誰か
知らめや

歸命頂禮消えてまた照る海雀人は目をとち
幽かにひらき

歸命頂禮誰し知らねば海雀耀きの輪をつく
りまた消つ

深淵

しんしんと淵に童が聲すなれ瞰下せば何も
なかりけるかも

深潭にちららちららと白雪のけはひつめた
く沈む人かも

いつまでも淵に潜りの影見えすあまり深く
も潜りけむかも

潜かぐりの子眞まこと逆さかさまに頭より躍り入りたり親
の子なれば

この淵にひそみて久し潜りの子親の子なれ
ば玉藻刈るらむ玉藻刈るらむ

蓴菜

戀しけどおゆき思はず蓴菜じゆんさいの銀の水みどり泥どろを掌て
に掬ひ居つ

人なればわれもまことに憔悴す
 尊菜光れこの沼深く

尊菜を掬へば水泥^{みどろ}掌^てにあまりて照り落つる
 なりまた沼ふかく

明るさや寥しきや人も来ず裸になれど泣く
 すべ知らずも

寂しけどおのれ耀き頸^{うな}かぶす膝までも深く
 泥^{どろ}に踏み入り

驚きもつくづく見れば鰻なり一面に光る沼
のまんなか

この沼ゆなにか湧きあがる恐ろしき光ある
見て逃げ上るわれは

照りかへる薄^{すすき}荇^か萱^かさみどりのひろびろし野
にほつと出でつも

眼鏡橋

眼鏡橋くぐりゆく水のをりをりに深く耀き
 やがて消えつもの

流れかね耀きの輪を水つくるそこに野菜を
 洗へり眞青に

日ざかりは短艇動かず水ゆかず瀉はつぶつ
 ぶ空は燦々

寂しけど何も思はずこの湯かたの銀泥ぎんどろの中に權
を突き入れ

わが短艇ポート力いつばい動かすと權を突き入れ
突きかがまるも

眼鏡橋めがねばしを中にわたして茶屋三戸ここの廓くわくは
日の照るばかり

日の光いつばいに照る眼鏡橋誰か越えむと
する眼鏡橋

眼鏡橋に西瓜断ち割る西瓜賣今ぞ廊くらやは晝寢
のさかり

眞晝間まっひるま子どもつまづきしばらくは何の聲だ
にせざりけるかも

眼鏡橋の眼鏡の中から眺むれば柳一本いちぼん風に
ゆるるる風にゆるるる

白日逍遙

寂しけど麥稈帽子ゆ照りこぼるる夏の光を
凝視^みめて行くも

寂しけど煌々と照るのぼり坂ただ眞直^{まこと}にの
ぼりけるかも

幅びろの光なだるるなだら坂動くばかりに
見えにけるかも

崖の上に照りてゆらめくものひとつ大いな
る百合と見て通りたり

寂しさに油壺から小網代へ歩みかへせど晝
ふかみかも

寂しさに山の眞晝の赤鳥居深くくぐりてま
た出て來るも

尻の神の赤き祠の眞つ晝間大肌になりて汗
ふきにけり

城ヶ島

草ふかき切りそぎ崖に大きなる男寝て居る
 寂しきものか

鶉の鳥と共に飛ばむとしたりしか鶉の鳥飛
 ばんとして飛びてゆく

飛びかける鳥につかまれ燦きらめく魚生きたる
 心地もなかるらむあはれ

飛びかける鳥魚をつかみあはれあはれ輝き
の空に墜おちなむとする

しみじみと海のはたてに見し煙いつのまに
やら大船となる大船となる

いつまでも向う向きたる人の頭いよよ光れ
ばいよよ憎しも

城ヶ島の女子をなごうららに裸となり見れば陰ほ出
しよく寝たるかも

城ヶ島の女子うららに裸となり鮑取らいで
何思ふらむか

うつらうつら海を眺めてありそうみの女子
裸となれりけるかも

海外の濱

蛸壺に蛸ひとつつひそまりてころがる畑
の太葱の花

深々と人間笑ふ聲すなり谷一面の白百合の
花

眞白なるところてんぐさ干す男くわうく煌々と照り
一人ひとりなりけり

菖蒲園

なにしかも一人ひとりひそかに白菖蒲しろあやめ咲けるみぎ
はに來りしものか

ひとり来て涙落ちけりかきつばたみながら
 萎み夏ふかみかも

明るけどあまり眞白ましろきかきつばたひと束に
 すれば何か暗かり

眞白にぞ輝りてさびしきかきつばた白き犬
 つれ見にと吾が来し

あはれなる廊くろわの裏のかきつばた夕ゆふさり覗く
 目もあるらむか

遊ヶ崎遊泳

さんさんと海に拔手を切る男しまし目に見
え晝はふかしも

ちちのみの父を裸になしまるらせ泳ぎにと
ゆくその子が二人

寂しければ両手張り切り相模灘を拔手切り
ゆく飛びゆくばかり

躍り入り拔手切れどもこの海の渦巻く潮
の力深しも

拔手を切り一列にゆく泳手の帽子ましろに
秋風の吹く

山海經

しんしんと寂しき心起りたり山にゆかめと
われ山に來ぬ

狐のかみそり

この心斷崖きりさしの上にと赤き狐のかみそり見
れど癒いえぬかも

狐のかみそり血の出づるやうな思して踏み
てゆかねば入日が赤し

狐のかみそりかたまりて赤し然れどもひと
つびとつに風吹けりけり

狐のかみそりしんしんと赤し然れどもかた
まりて咲いけば憤いほろしも

毒ある赤き狐のかみそりは悲しき馬に食ま
してかな

註、馬この花を食らへば死す

ただひとり鴉殺すとはばからず紅く踏みし
く狐のかみそり

淫らにして恒心なきもの實じつに寂しそこにも
ここにも狐のかみそり

原つばに狐のかみそりただ赤しわつとばか
りに逃げ出すわれは

海光

海にゆかばこの寂しさも忘れむ海にゆか
めとうちいでて来ぬ

漕ぎいでてあはれはるばる来しものか沖に
立つ波かぎり知られず

われと櫓をわれと禮拜おろがむ心なりひとすちに
水脈みづを光らしてゆけば

金色こんじきの飛沫しぶきつめたたく天そらをうつ大海だいかいの波は悲
しかりけり

一心に舟を漕ぐ男おとこ遙はるに見ゆ金色の日がくる
くると射さし

尿いせりすれば金の光のひとすちがさんさんと落
ちて弾はぢきかへすも

北齋きたさいの天あまをうつ波なだれ落ちたちまち不二
は消えてけるかも

飛の魚強くはばたきひと列つら飛びて翔たぎれりくる
しきか海が

飛の魚連つらて一ひと列つら挿ま櫛じの月つき形がたなせば君の戀し
き

躍り入りひとり泳げばしみじみと寂しき魚
の臍突へそきに來ぬ

泳げば底より足をひくものあり人間の足を
ひくものあり

大きな人あらはれて目の前に不意に舟漕
ぐうれしさうれしさ

炎々と入日目の前の大きな静かなる帆に
燃えつきにけり

はてしなくおほらにうねる海の波暮れてひ
もじき夜となりにけり

舟とめてひそかに黙す闇の中深海底の響き
こゆる

はてしなき海の真中に舟をうけ泣くに泣か
れずわれは鳥賊釣る

我は鳥賊釣る鼠子のごと軽卒しく悲しき鳥
賊を夜もすがら釣る

鳥賊釣ると海の真底のいと暗きものの動き
を凝視め我居り

あなあはれ人間闇の海にゐて漁火を焚くそ
の火赤しも

赤硝子

赤硝子戸びつたりと閉め音もなしそこに生
 物われひそみ居つ

赤硝子戸びつたりと閉めなにもものも入るな
 かれとひそみて居るも
 日の光いつばいに射しわが手足赤硝子より
 さらに赤しも

赤硝子窓腐れ鮑あほまを日に干すとしよんぼり母
の外とに立たす見ゆ

赤硝子戸、赤き卵の累々あひくとつまりたる函縁あひ側がは
に見ゆ

赤硝子外そとの光に押し黙だまり赤き人間何をか爲
すも

二方ふたに向きかたて犬ある赤硝子戸うちたたきて
も逃げざりにけり

寂しき日

庭前小景

かぢめ舟けふのよき日にうちむれていちど
きにあぐる棹のかなしも

春過ぎて夏來るらし白妙しろたへのところてんぐさ
取る人のみゆ

日は麗ら薔薇ささづきあまりに色紅あかしわつと泣かむ
と思へどもわれ

日の光そこにかんかん眞四角の氷の角は照
らされにけり

天を見て膨れかがやく河豚かぶらの腹ぽんと張り
切る晝ふかみかも

青芝にそつと放せば晝深み生いさの伊勢蝦飛び
はねにたり

ゆつたりと蒲團の綿は干されたり傍そばに鋭き
赤たうがらし

しみじみと水にひたせど眞珠貝遂に水をも
吸はざりにけり

餌舟ゑさふねに光り漕ぎ寄り静まれる舟いちどきに
動きけるかも

鰻

庭前小景

鰻籠はちぎれむばかりゆらゆら日をい
つぱいに浴びてけるかも

籠の中につまる鰻の底力そぢぢからうねりやまずも麗うるは
らかなれば

思ひあまり躍りゆらめく鰻籠ちつと抑ゆる
こころなりけり

麗うるはらかやなにか恐れて鰻の兒籠をするりと
抜けてけるかも

庭もせにくれなるふかき松葉菊鰻飛び超え
ゆくへ知らずも

麗らかに鰻探すと松葉菊わけて大きな目を
 瞠り居り

紅き花をかきわけて見れば鰻の兒隅にとろ
 りと居たりけるかも

松葉菊ふかく紅けば鰻の兒安心をして動か
 ざりにけり

花の中に抑へられたり鰻の兒命懸けにて逃
 げにしものを

海底

庭前小景

寂しさに海を覗けばあはれあはれ章魚逃げ
てゆく眞晝の光

章魚を逃がし海を覗けば章魚が歩行くほか
に何にもなかりけるかも

海底の海鼠のそばに海膽居りそこに日の照
る晝ふかみかも

動かねどをりをり光る朱海膽あかひとでしみらに見れば歩めりにけり

寂しさに手足動かす朱海膽あかひとで海膽の上に重なりけり

海峡の夕焼

庭前小景

石崖に子ども七人腰かけて河豚を釣り居り
夕焼小焼

二本つつ鯖を投げ出す二本の手そろうて光
りてありにけるかも

棧橋にどかりと一本大鮪放り出されてあり
たり日暮

しんしんと夕さりくれぼ城ヶ島の魚籠押し
流し汐満ちきたる

舟漕ぎ寄せ沖の魚籠にざらにあくる伊勢蝦
赤し夏の夕ぐれ

わが父を深く怨むと鰻籠蹴りころばしてゐ
たりけりわれ

權おつとり舟に飛び下りむちやくちやに漕
ぎまはる赤き赤き夕ぐれ

城ヶ島の落日

城ヶ島の燈明臺にぶん廻す落日いっひ避雷針ぬに貫
かれけるかも

城ヶ島さつとひろげし投網なみのなかに大日たいにちく
るめきにけり

大日輪落ちつきはらひ伊豆の岬さきの天城山あまぎやまへ
とかかりけるかも

良夜

今宵こよひことに月明らかに海原の底のことごと
はつきりと見ゆ

赤々と十五夜の月海にありそこに泳げる人
ひとり見ゆ

大だいの月海の中からまんまろくまろびいづれ
ば吾泣かむとす

深夜

憤怒いきどほり抑へかぬれば夜おそく起きてすばりと
切る鮪まぐろかも

自然靜觀

波つづき銀ぎんのさざなみはてしなくかがやく
海を日もすがら見る

漣

病床吟

網高く干せるその上の漣のかぎり知られね
 さざなみの列なみ

見廻せどたへて人こそなかりけれ海の漣た
 だ光り消え

漣なみのこのもかのもの時折に光りまた消え照
 り光り消え

日もすがら光り消えたりうねり波思ひ出し
 たりまた忘れたり

鳥とまり光りゆらめく海中わたなかの雁木がんぎひとつを
消ぬがにぞ見る

音もなき海のかたへの麗らなるわが屋やの下
のさざなみの列ら

音もなき眞夏晝なか音もなく鳥は雁木を去
りにけるかも

麗らかや此方こなたへ此方こなたへかがやき來る沖のさ
ざなみかぎり知られず

漣の上にちらばるさざなみのうへのつり舟
見れど飽かなく

漣の光りががやく晝深しぽんと林檎を棄て
にけるかも

舟

うつらうつら海に舟こそ音すなれいかなる
舟の通るなるらむ

霽の雨

しみじみと海に雨ふり霽あはれの雨利休鼠となり
 てけるかも

城ヶ島のさみどりの上へにふる雨の今朝けさふる
 雨のしみらなるかな

北齋の簞たねと笠かさとが時をりに投網なげみひろぐるふ
 る雨の中

海の中に光り輪を畫く滯のすぢ末はわか
れて行方知らずも

漕ぎつれていそぐ釣舟二方に濡れて消えゆ
くあまの釣舟

二方になりてわかるるあま小舟滯も二手に
わかれけるかも

通り矢と城ヶ島邊にふる雨の間の入海舟わ
かれゆく

薔薇静観

大きなる紅薔薇の花ゆくりなくばつと眞紅
にひらきけるかも

目を開けてつくづく見れば薔薇の木に薔薇
が眞紅に咲いてけるかも

薔薇の木に薔薇の花咲くあなかしこ何の不
思議もないけれどなも

風くれば薔薇はたちまち火となれり躍りあ
がるらむうれしき風に

驚きてわが身も光るばかりかな大きな薔
薇の花照りかへる

ただ見ればこれかりそめの薔薇の花驚きて
見ればその花動く

午過ぎてますます紅き薔薇の花ますます重
く傾むきゆくも

薔薇の花うちゆるがむとせしかども思ひか
へしつますます光り

大きなる何事もなき薔薇の花ふとのほづみ
にくづれけるかも

急須と茶碗

日の光い照りかへせばくれなるに急須きよす動き
てしじに燃ゆるも

燃えあがる急須つらつらその息をそばの
茶碗に薫かそしけるかも

急須燃えそしてまろらに茶碗あるこの親し
さの限り知られず

日ぐらし急須と茶碗とさしむかひ泣くが如
しもその湯氣立てば

ふつふつと小ちさき生物いきもの香かを放つうつくしき
かもまんまろな盆に

いついかに誰がさしよせし知らねども涙ぐ
ましも茶碗と急須

急須燃え茶碗湯氣ふくそれよりもなほ温か
きなからひにして

思ひあまり急須と茶碗と人知れずそがひに
廻り泣けるごとしも

何ちやとてそげなそしらぬふりをする急須
こち向け日も暮るるぞよ

地面と野菜

174

盆の上に急須ありまた茶碗あるここの世界
も安からなくに



地面と野菜

○
大きな足が地面ちべたを踏みつけゆく力あふる
る人間の足が



畑に出でて見ればキヤベツの玉の列ち白猫の
ごと輝きて居る

地面ち踏めば燕かぶらみどりの葉をみだすいつくし
きかもわが足の上

地面ちより轉ころげ出でたる玉キヤベツいつくし
きかも皆玉のごと

摩訶ま不思議ふしぎ思しひもかけぬわが知らぬ大きな
るキヤベツがわが前に居る

しんしんと湧きあがる力新らしきキヤベツ
を内うちから弾はぢき飛ばすも

さ緑のキヤベツの球たま葉はいく層かさね光る内なかより弾はぢ
けたりけり

大きな眼まなこがキヤベツを見てゐたりたまら
ず涙ながしけるかも

ふと見つけて難有きかもさ緑の野菜のかけ
の大きな片足

投網うちの歸途

重々と濡れし投網を蕪畑蕪葉の上に吾がか
 い手操る

蕪の葉に濡れし投網をかいたぐり飛び翻る
 河豚を抑へたりけり
 蕪の葉に濡れし投網を眞晝間ひきずりて歩
 む男なりけり

晝休憩

麥藁帽子野菜の反射いつばいに受けて西日
にかがみてあるも

晝休憩秋の地面に投げいだす百姓の戀もあ
はれなるかな

銀いろの蕪の中に坐りたる面黒の眼のみ大
きな娘

積藁のかげむくむく湧きあがるパイプの煙
見つつ眞赤な日にあたり居り

秋の田の稲の刈穂の新藁の積藁のかげに誰
か居るぞも

寂しけば娘ひきよせこの男力いつばいに抱
きぬるかも

日ざかりの黒檜の木の南風素つ裸なる夫婦
に吹くも

畑に飛んで交む鶴鴿一點の白金光となりて
けるかな

道のべの馬糞ひろひもあかあかと照らし出
されつ秋風吹けば

泥豚

豚小屋に呻きころがる豚のかずいつくしき
かもみな生けりけり

豚小屋の上の棕櫚の木の裂葉より日は八方
に輝きにけれ

大きなる白の泥豚照りかがやきいびきとどろに
地面ぢべんを揺ゆる

いぎたなき豚のいびきのともしれば靈妙音
に歌ふなりけり

泥豚のあはれな軒日もすがら雁來紅をゆす
りてあるも

逞たねましき種豚ぶたの躰たねはりつめたる雌めが腹はらの乳ち
に沁しみみて響ひびくかも

棕櫚しんりの木きに人ひと攀のぼちのぼり棕櫚しんりの木きの赤あかき毛け
をむく眞まこと晝ひるなりけり

棕櫚しんりの木きのしみ輝ある下したに家畜けちものあはれ命いのちやる
せなくいまつるみたり

種豚たねぶたは深く押し黙だまり棕櫚しんりの木きのかがやける
もとをまた廻めぐりたり

白豚の精の眞玉のあはれあはれ龍膽の花に
ころがりつるか

豚小屋は寂し下ゆく路赤く極まり盡きて海
光る見ゆ

激しく空腹じくなりけむつるみてのち一心
に豚は草食めりけり

ひとかたまり豚の兒が頭うち振るが可哀い
や張りつめし母の八乳房の上に

現身うしみの泥豚の兒が啼いて居りその泥豚の兒
と兒重なり

生めよ殖ふえよしんじつ食くらひいきいきと生いきの
いのちに相觸れよ豚よ

五郎作よしんじつ不愍ふびんと思ふならば豚を豚
として轉ころがして置け

夕日が赤し餌をやれ五郎作けだものは饑う
れば糞も食くらはむずるぞ

寂しきにか豚は豚どちしみじみと入日に起
きて小便しょうべんをしぬ

家畜けいぶらは赤くかがやき照りかへる世界の中
に照り揺れやまず

丘の立秋

片岡に粟と豆とが赤ちやけて深くささやく
熟うれにけるかも

穩おだやかに深く息づく枝豆に夕日あかあかと照
りしみやまね

しみじみと豆をもぎれば豆の聲夕日照り沁
み秋の丘べに

あかき日の光の中に轉ころげ出て恍ほれたる豆が
聲絶えてゐる

はや秋深く俯うつむく豆畑の麥稈帽子の縁つばの痛
さよ

犬の小便

夕日赤し小犬しみにらに岐れ路の間の青木に
 小便をすも

青木に犬の小便したたれり美しくしきかな小
 さき青木に

目の前にしんじつかかる一本の青木立てり
 と知らざりしかな

何といふ^つ度ましきぞよあかあかと青木一本
日に燃えてゐる

小便^{しんべん}して犬は寂しく飛びゆけり火の如く野
菜をかきわくる見ゆ

秋高し

枯草の籠のなかなる赤ん坊が大きなる馬に
乗りてゆきにけり

深夜抄

206

秋高しくゐいくゐいりりりと鳴く鳥の聲は
野山をけふかけめぐる

三日の月ほそくきらめく黍畑きよはたけ黍は黍とし目
の醒めてあつ

黍畑

黍畑きびばたの黍の上なる三日の月月より細こまかき糠ぬか
星ほしのかず

森羅もんのら萬象ばんざう寢しづみ紅あかきもろこしの房のみ動
く醒めにけらしも

三日の月眞の闇夜にあらねども眞の闇夜よ
りさらになさみしも

ほのかなる人の言葉に觸ふりたれば驚くもの
か黍は小夜こよふけ

三日の月谷底見れば廊くろわにはならぶ華魁豆わいらんの
如しも

小夜さよふけてほかに人こそ音すなれいつこの
闇やみを行けるなるらむ

猫のうぶごゑ

烏羽玉うはたまの闇の粟穂の奥ふかくするどき猫の
うぶ聲うぶこゑきこゆ

闇の夜に躍り出てたる金無垢の生の子猫の
うぶ聲きこゆ

母猫の大黒猫の闇に坐り大まかに啼く子を
産み落し

闇の夜に生まれ落ちたる猫の兒があはれあ
はれ猫の聲すもよいま

闇の夜に猫のうぶこゑ聴くものは金環ほそ
きついたちの月

闇
夜

何事か爲さでかなはぬ願湧く海の夜ふけの
闇のそよかせ

闇の夜も生活いぢらしたたねばとなりびと舟ひき下
ろし漕ぎいでてゆく

戸あくれば金無垢の月いま走る幽かに暗き
そよかせの中うち

闇の海に金無垢の月いとほそくかげうつし
ほのに消えにけるかも

闇ふかしひとりひそかに寝ざめして思ふは
おのがいのちなりけり

空暗く入海暗し海よりも黒き島見え松動く
見ゆ

一心に島と陸くがとに鳴く蟲の聲澄み入れり闇
夜なりけり

黒き花瓶

小夜ふけて夜のふけゆけばきりぎりす黒き
花瓶はなびんを啖くはへるらしも

晝見てし黒き花瓶のありどころあやめもわ
かね夜の闇の中

小夜ふけて黒き花瓶の把手てより幽かに光さ
すかとぞ思ふ

二本の棕櫚

天の河棕櫚と棕櫚との間より幽かに白し闌
 けにけらしも

耳澄ませば闇の夜天ヤをしろしめす圖り知ら
 れぬものの聲すも

棕櫚二本ここの夜天の吾が聲は幽かなれど
 も偽れなくに

何物の澄みて流るる知らねどもここの夜天
の光ふかしも

あなかしこ棕櫚と棕櫚との間より闇浮檀金
の月いでにけり

臨海秋景

水邊の午後

日ひの移うつるなり
鬱こん蒼ちりと楊や柳なかがやくままささびしき遠とほき入い江えに

かげ曇る岸の葉柳時をりに深くかがやくな
ほ堪へられず

漣さざなみ何が憂しとて鈍銀にぶぎんに暗くかけり
てまた照るものか

千鳥ゐるされどあかるきさざなみの銀無垢
光に眼めも向けられず

水の邊に光りゆらめく河やなぎ木橋わたれ
ばわれもゆらめく

橋をわたりつくづくおもふこれぞこのいづ
こより來し水のながれか

三角と豆々の葉の木が二本舟が一艘さざな
みの列

とま舟の苫はねのけて北齋の爺おぢが顔出す秋
の夕ぐれ

照りかへる銀のさざなみ河やなぎ白き月さ
へその上に見ゆ

はろばろに波かがやけば堪へがたしぴんと
一匹釣りにけるかな

銀のごと時にひろごる網の目はこれ寂寥せきりやうの
眼まなこなりけり

蘆と蘆幽かに銀のさざなみを立ててかこち
ぬ今日も暮れぬと

海原うなばらのこのもかのもの銀鼠ぎんねずみ千々に碎くるか
のもこのもに

銀ながし

鳥の聲黒櫨くろがしの木の照り圓まるき梢うねよりきこゆ日
の光満ち

遠とほ丘おかの黒櫨くろがしの木の幹なかば銀ながしたる秋
の海見ゆ

遠丘の向うに光る秋の海そこにくつきり人
鋏あをうつ

岬見え向うの海とこなたの海光りかがやく
 こなたは暗く

丘の上に海見え海に岬見えその上の海に舟
 いそぐ見ゆ

朝出でてゆき遙けかりあま小舟黒胡麻くろごまのご
 とく眞晝散らばり

大空に銀の點々ちらばるはあまのつり舟櫓
 を漕げるなり

この岬行き盡すまで急がむと思ひきはめて
吾が辿るなり

金いろに光りてほそき磯はなのその一角に
日の消えんとす

二町谷小景

網の目に闇えん浮ぶ檀だ金ごんの佛ぶつゐて光りかがやく秋
の夕ぐれ

兩の掌に輝りてこぼるる魚のかず掬へども
掬へどもまた輝りこぼるる

うしろより西日射せればあな寂し金色に光
る漁師のあたま

駿河なる不二の高嶺をふり仰ぎ大きな網
をさと擴げたり

落つ日の照りきはまれば何がなし小鳥岬を
いま放れたり

赤き日に眞向まっこうに飛ぶ鳥のはね遂に飛び入り
行方ゆくへ知らずも

海の波光り重なり日もすがら光り重なりま
た暮れにけり

山中秋景

木々の上へを光り消えゆく鳥のかず遠空の中
にあつまるあはれ

山峽やまがひに橋を架けむと耀くは行基菩薩こんじきか金色
光くわうに

谷底に人間のごと戀しきは彼か金柑の光るな
りけり

二方ふたかたに光りかがやく秋の海その二方ふたかたに白帆
ゆく見ゆ

煙立つ紅葉もみぢの峽がひにしろがねの入江ひらけて
舟はしるなり

麗^{うら}うらと日照りさしそふ秋山に心ぼそくも
立つる煙か

帆をかけて心ぼそげにゆく舟の一路^{いちろ}かなし
も麗らかなれば

金の星このもかのもの岨^{さば}をゆく彼らは枯草
負^おひたる童

松並木中に一點寂しきは金^{きん}の茶店の甘酒の
釜

大きなる赤きまんじつ圓日海にありすなはち海へと
下りけるかも

引橋の茶屋のほとりをいそぐときほとほと
秋は過ぎぬと思ひき

漁村晩秋

あなあはれ日の消えがたの水ぎはに枯木一
本赤き夕ぐれ

かくのごとき秋の寂しさわれ愛す枯木いも一木ぼく
幽かに光る

那邊なへんより出で來し我ぞ行く我ぞ頭幽かすかにか
がやき光り

秋の色いまか極まる聲もなき人豆のごと橋
わたる見ゆ

人はいま一番いっばん高き木のうへに鴉鳴く見て橋
わたりたり

一心に遊ぶ子ども
の聲すなり赤きとまやの
秋の夕ぐれ

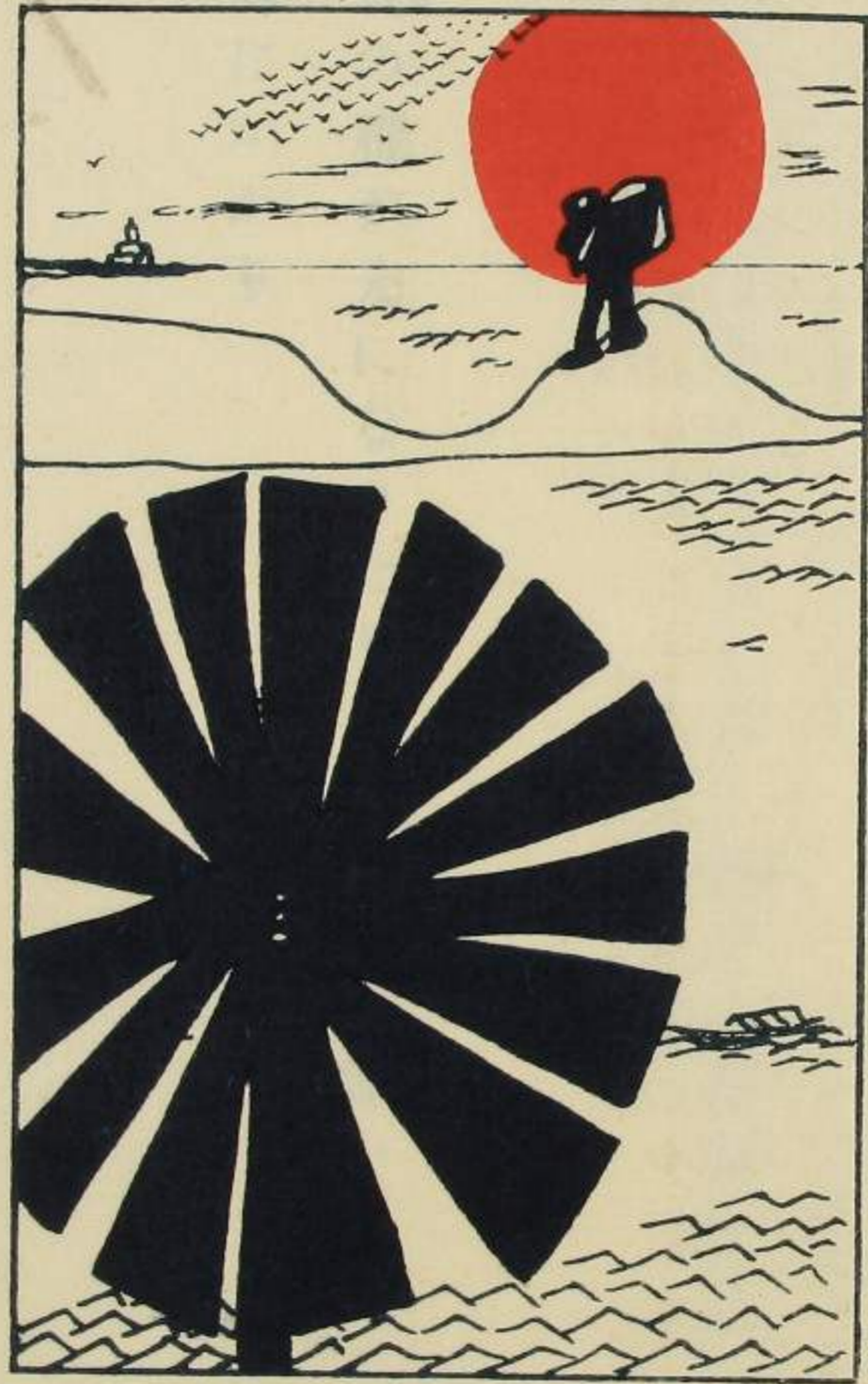
藁屋ありはねつるべ
動く水の邊の田圃の赤
き秋の夕ぐれ

けつけつと鳴くは何鳥
あかあかと葦間の夕
日消えてけらずや

金の星ひとつ消えゆく
思なり童子幽かに御
寺に入る

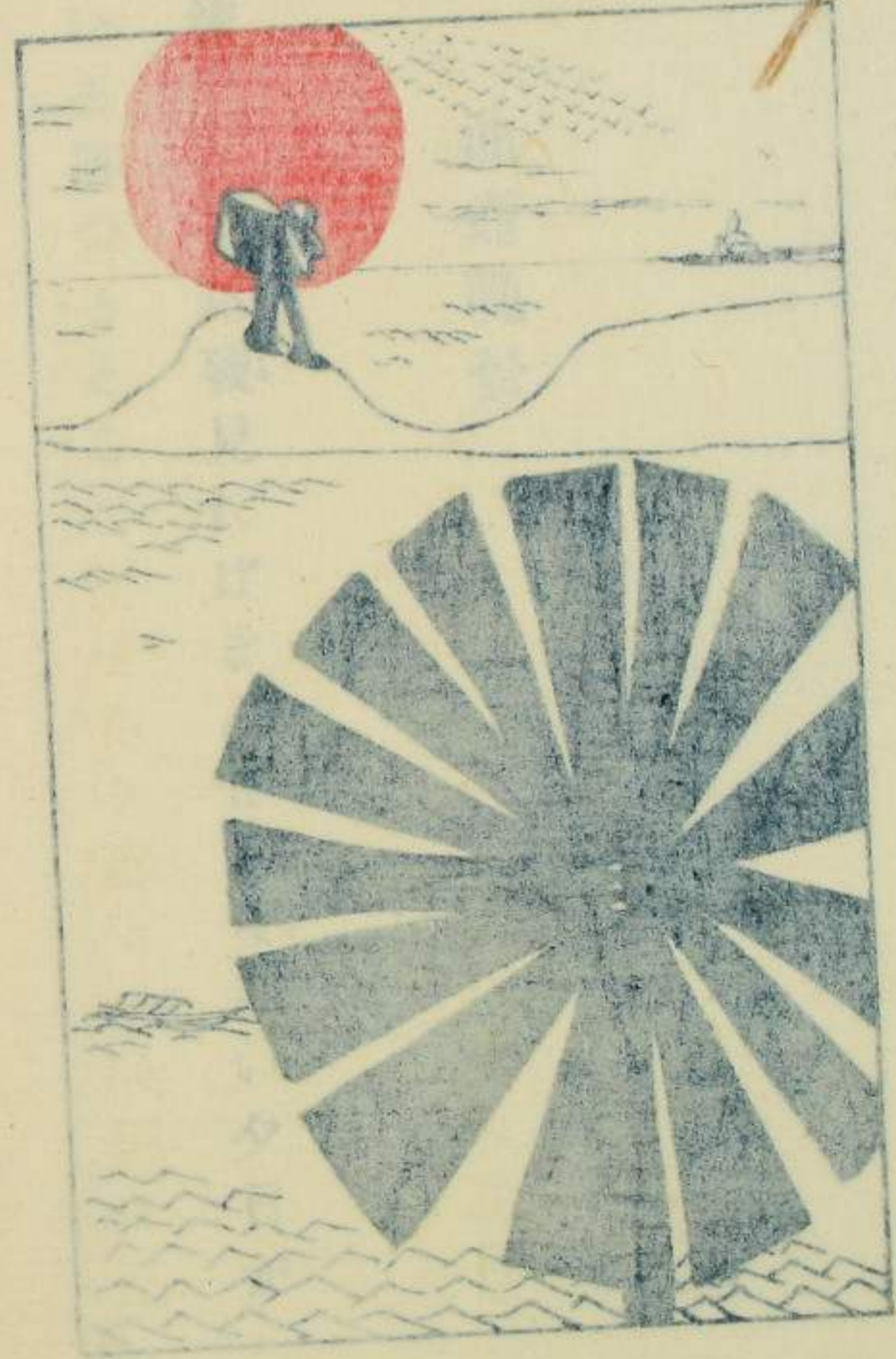
油壺晩景

油壺から諸磯見ればまんまろな赤い夕日が
いま落つるところ



岬さきにかかり
後の雁かりが先さきになりたり
あなあはれ赤い圓日

羽
夕ゆふ焼やき小こ焼やき大おほ風かぜ車ぐるまの上うへをゆゆく雁かりが
一ひと列れつ鴉からが三さん



赤々と夕日廻れば一またぎ向うの小山を人
跨またぐ見ゆ

油壺しんととろりとして深ししんととろり
と底から光り

法悦三品

なりけり
金色こんじきの三角畑にしみじみと人參の種蒔ける

種蒔

巡禮と野の種蒔人となにごとか金色の陽に
物言へりけり

ひさかたの金色光の照るところ種蒔人三人
背をかめたり

巡禮がほのかなる言云ひしかば種蒔人三人
背をかめたり

度ましきミレエが畫に似る夕あかり種蒔人
そろうて身をかめたり

金柑の木

その一 巡禮

照りかへる金柑の木がただひと木庭にいつ
ぱいに日をこぼし居り

はるばると金柑の木にたどりつき巡禮草鞋わらじ
をはきかへにけり

巡禮が金柑の木をふりあふぐ熟れたるかも
よ梢の金柑

かくなれば金柑の木も佛ほとけなり忝かたじけじけなやな
實みが照りこぼるる

かうかうと金柑の木の照るところ巡禮の子
はひとりなりけり

照りかへる金柑の木のかけを出て巡禮すな
はち鈴ふりにけり

その二 農人

まかがやく金柑の木の蔭に立ち黒き土くれ
 人掘りかへす

人ふたり光りよろめく金柑の金色こんじきの木の根
 をうちかへす

さくさくと大判小判の音すなれ金柑の木の
 根かたを掘れば

この畑の金柑のかげで云ふことをよくきい
てくれそれなる娘

その三 秋風

かうかうと今ぞこの世のものならぬ金柑の
木に秋風ぞ吹く

吹く風はせちに心をかきむしる人間界のわ
れならなくに

いつしかに金柑の木と身をなして吹く秋風
に驚くわれは

その四 静坐抄

夕されば闇浮檀金の木の光またかうかうと
よろめきにけり

ここに來て梁塵秘抄を讀むときは金色光の
さす心地する

遠樹抄

西方に金の遠樹ゑんじゆのただふたつ深くかがやく
 何といふ木ぞ

かうかうと金の射光の二方ふたかたに射す野つ原ぼちに
 木の二本見ゆ

夕されば金の煙の立つごとく木はかうかう
 とよろめきにけり

金色の木をかうかうと見はるかすこれは枯

野の草刈り男

金色のかの木のかげに照りかへり動くもの
あり人にはあらしか

虔^{まご}ましき金の歩みやつづくらむ親鸞上人野
を行かす見ゆ

樹はまさしく千手観音菩薩なり西金色の秋
の夕ぐれ

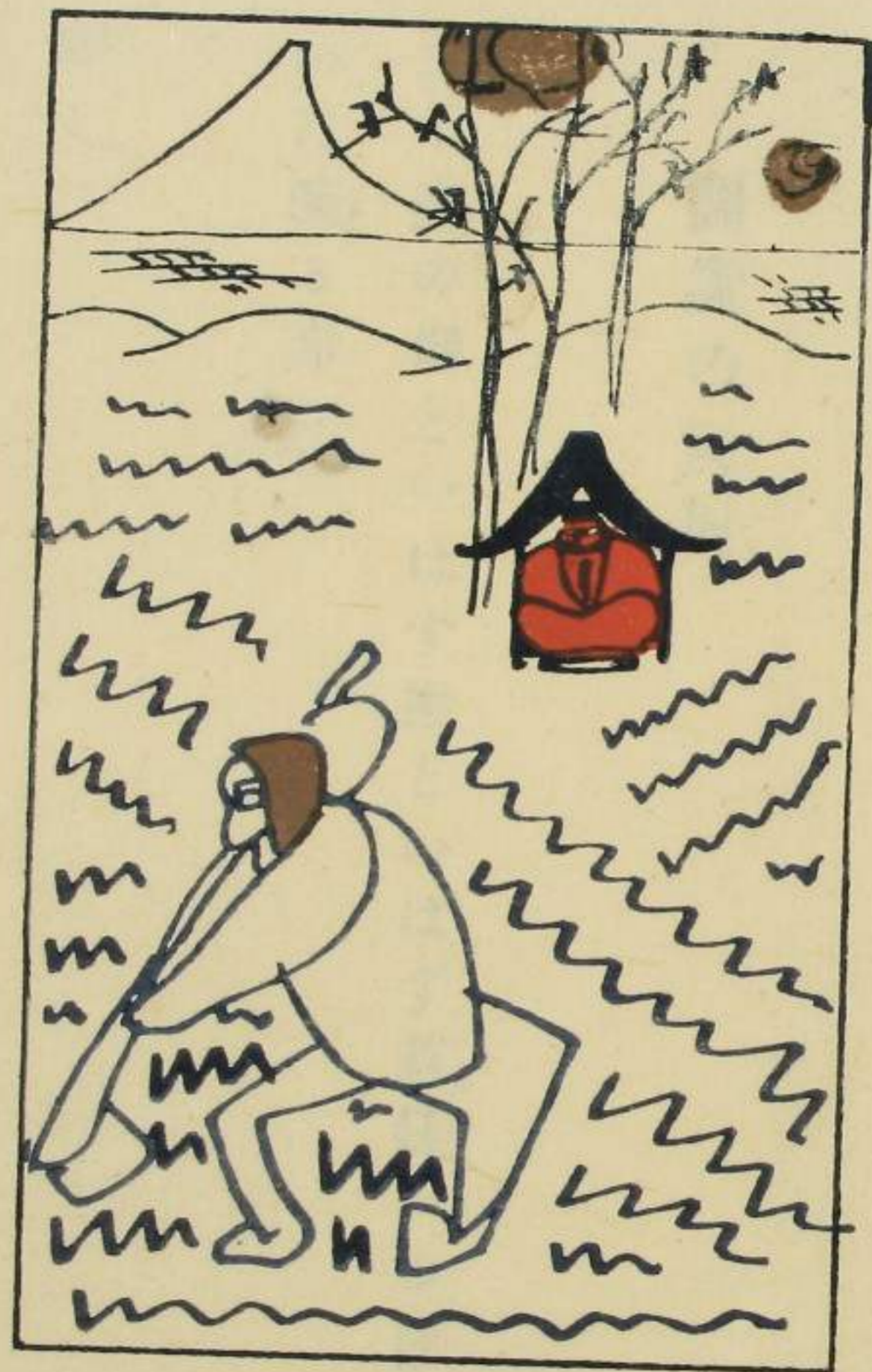
かうかうと風の吹きしく夕ぐれは金色の木
木もあはれなるかな

見るからに秋のあはれに吹きしくは金色の
木の嵐なりけり

こなた向き木々のかなしくいたぶるは金色
の風の吹けばなりけり

なほしばし我を忘れて金色の木々のかなた
を飛ぶよしもかな

閻魔の反射



ライ麦の畑といはず崖といはず落日いひいつば
いにしたた滴る赤さ

閻魔の反射



枯林炎々たれども枯林なにかしら寂しかの

枯林

崖^{がは}下^{した}のかの狂人^{きやうじん}の一軒家赤くかがやきかが
やきやまず

ライ麥の青き縞^{しま}目の縦横^{たてよこ}に赤々し冬^{ふゆ}の日の
沁みてける

赤き日は人形のごとく鋏をうつ悲しき男を
照らしつるかも

赤き日にかんかんとうつ鉦かねの音冬の枯野に
うつ鉦の音

赤き日に棕櫚の木三本照り寂しそこの藁屋わらや
にうつ鉦の音

鍬打て日は三角畑さんかくはたけのお茶の芽に赤く反射へきし
かつ照りやまず

赤き日に黒き刺葉ほりばの沁み揺るる柗ひいらぎの根を人
うちかへす

大きなる閻魔の朱面しゆめんくわつと照りかがやく
寂しき寂しき畑

畑打てば閻魔大王光るなり枯木二三本に鴉
ちらばり

鍬下ろせばうしろ向かるる冬の畑そこに眞まこと
赤かな閻魔かの反射はんしや

馬頭觀世音の前を通れば甘薯いも畑ばたけ盲人めくらこち向
け日が眞赤まっかぞよ

盲人めくらよ盲人めくら一心に何か聴きすましあかあかし顔を日に向けてゐる

悲しき悲しき闇魔の反射畑中に日が明け日が暮れ歎うちやまず

畑打ち人形

赤き日に畑打人形が畑をうつ畑打人形は悲しき夫婦めをと

人間のこれの夫婦めをとはいと寂し人ませもせず
 畑うちかへす

人間のこれの夫婦めをとはいと寂したんだ黙だまつて
 畑うちかへす

人間のこれの夫婦めをとはいと寂し時に尻向け畑
 うちかへす

涙こぼし一人ひとりうしろを向いたれば一人が眞
 赤な日にうちかへす

時折りに夫婦向きあひ畑をうつ拜む如くに
悲しき人形

大日だいにとちを中なかつにころがし右左畑打人形は畑うち
かへす

曼珠沙華抄

秋の野にあまりに眞赤な曼珠沙華その曼珠
沙華取りて捨ちよやれ

二人見て來むぞ眞赤な曼珠沙華松の小蔭に
ちよと入りて來むぞ

こち向け牝牛供養の石が立てり曼珠沙華の
花赤き路ばた

耕田

曼珠沙華の花あかあかと咲くところ牛と人
とが田を鋤きてゐる

秋深し

童らが遊ばずなりて曼珠沙華ますます赤く
動かであるも

田舎道

大きなる大きなる赤き日の玉が一番赤くこ
ろがれり冬

田舎道のぼりつめたるかなたより馬車あか
あかとかがやきて來も

燃えあがる落日の櫛あちこちに天を焦がす
こそ苦しかりけれ

藁小屋と赤くかがやくなだら坂日をいつば
いに浴びて親しも

路のべに遊ぶ童がかぶる髮光輪はなつこぼ
るるばかり

馬頭觀世音立てるところに馬居りて下を見
て居り冬の光に

金色こんじきの赤馬あかの尻毛しかのふつさりと垂れて静け
き夕なりけり

人參の髯

夕されば光こまかにふりこぼす人參の髯も
あはれなりけり

木がらし

はろばろに枯木わくれば甘藷畑おつ魂げる
やうな日が落ちて居る

目も遙はるに嵐吹きしく枯野原空に落日いりひが半分
紅あかく
人ひとりあらはれわたる土の橋橋の兩岸りせうた
だ冬の風

絹帽シルクハット吹き飛ばしたり冬の風落日いりひ眞赤まっかな一本
橋に

轉ころがつてゆく絹帽シルクハットを追つかける紳士老いた
り野は冬の風

數珠つながり赤い閻魔をぐるぐると廻る童
を吹く冬の風

木がらしに白髪しちがかきたれ來る媼おきな負へる赤子
は石の如しも

大椿抄

大きなる椿の樹ありあかあかとひとつも花
を落さざりけり

花あまりにここだつけたる椿の枝ひきずる
ばかりに垂れにけるかも

山椿照りおそろしき眞晝時小僧黙だまつて坂下か
りて來も

積藁の上に大樹の山椿丹念に落す花眞紅な
り

ほつたりと思ひあまれば地に紅く落ちて音
する椿なりけり

大きな椿ほたりと落ちしなり屹驚するな
東京の子供

大きなる櫓權かつぐと大きなる櫓權椿につ
かえけるかも

風吹く椿

積藁にこぼれ落つる椿火のごとしすなはち
畑を風走るなり

風はしる紅き椿をひとゆすり枯木十二三本
からからゆすり
風はしる目ざめし如くあかあかと椿一時に
耀く紅く

畑中に紅く耀く一本椿椿飛び越え風はしる
なり

枯枝の鴉吹き飛ばし風はしる椿耀く耀く紅
く

カンヴスをひつくりかへし風はしる椿耀く
耀く紅く

耀く椿前にわが立つ一本椿風吹け風吹け耀
く椿

赤き鳥居

冬の日を正面まともに受けてやや寒くまかがやく
赤き鳥居小さしも

ここ過ぎて幾度いくたび涙落しけむ一尺の赤き鳥居
の光

前うしろに百姓種蒔く畑中の赤き鳥居のし
みらの耀き

枯木いっぼん一本赤き鳥居と石ふたつこれぞ陰陽神おんみやうじん
のましますところ

夕さりくれば一人いちにんもあらずなりにけり赤き
鳥居とりいの周囲まわりの種蒔たねまき

見桃寺抄

見桃寺冬さりくればあかあかと日にけに寂
し夕焼けにつつ

西日抄

明り障子冬の西日をいつばいにうけて眞赤
になりたりあはれ

この庵いほに三月みつき五月いづつき棲み馴れていよよ親しむ
西日の反射

夕焼空蘇鐵の上にいと赤し蘇鐵の下に地も
また赤し

あかあかと冬の蘇鐵にはちく日の飛沫とほもかな
し地に沁みにつつ

吾等また黙だまつて蘇鐵見て居たりいづくりと
今は落ちつきにけむ

桃の御所の庭の西日に下りて吾が巡禮の子
にもものいふこころ

ゆづり葉に西日射すときゆづり葉のかげに
巡禮鉦うちけり

赤々と碁盤碁ばんの角に日はさして五目並べは吾
が負けにけり

隣の厨

日は暮れぬ 翳なほ干す 旃陀羅が暗き垣根の
白菊の花

寂しさに秋成が書讀みさして庭に出でたり
白菊の花

ゆくりなく闇に大きく菊動くと見れば向う
に火の燃えあがる

火の中に不動明王おはすなり
 焰えんえん今
 燃えあがる

火の中に不動明王おはすなり
 あなかたじけ
 なあなかたじけな

櫓をかつぎ漁人かまどの
 前をゆくその櫓たちま
 ち火に照る赤く

火の燃ゆればあはれなること
 限りなしあか
 あかとをどる厨うつはの器

圓^{つぶ}ら眼の童子かまどの前に居りあなひもじ
 さよ焰の躍^{をど}り

寂しきは鍋にはみ出す魚^{さかな}の尾厨の火光^{かり}白菊
 の花

鍋の尻赤くゆらめくただ楽し漁村のよき夜
 安らかなれよ

渚の西日

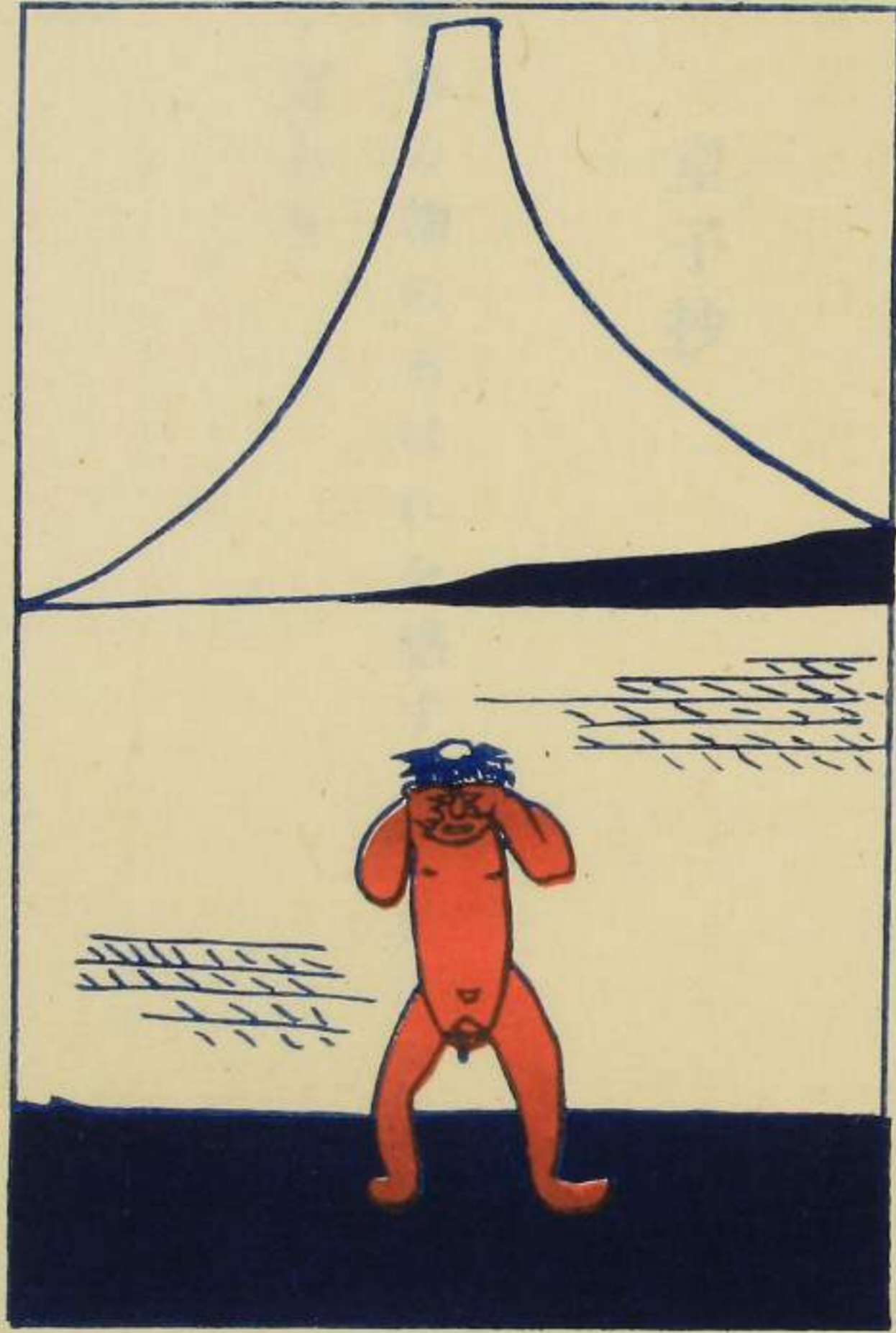
おほわだつみのまへにあそべる幼などち遊
び足らずてけふも暮れにけり

赤き日に彼ら無心に遊べども寂しかりけり
童わらわがあたま

大きなる赤き日輪海にあれど汝なが父いまだ
歸らざりけり

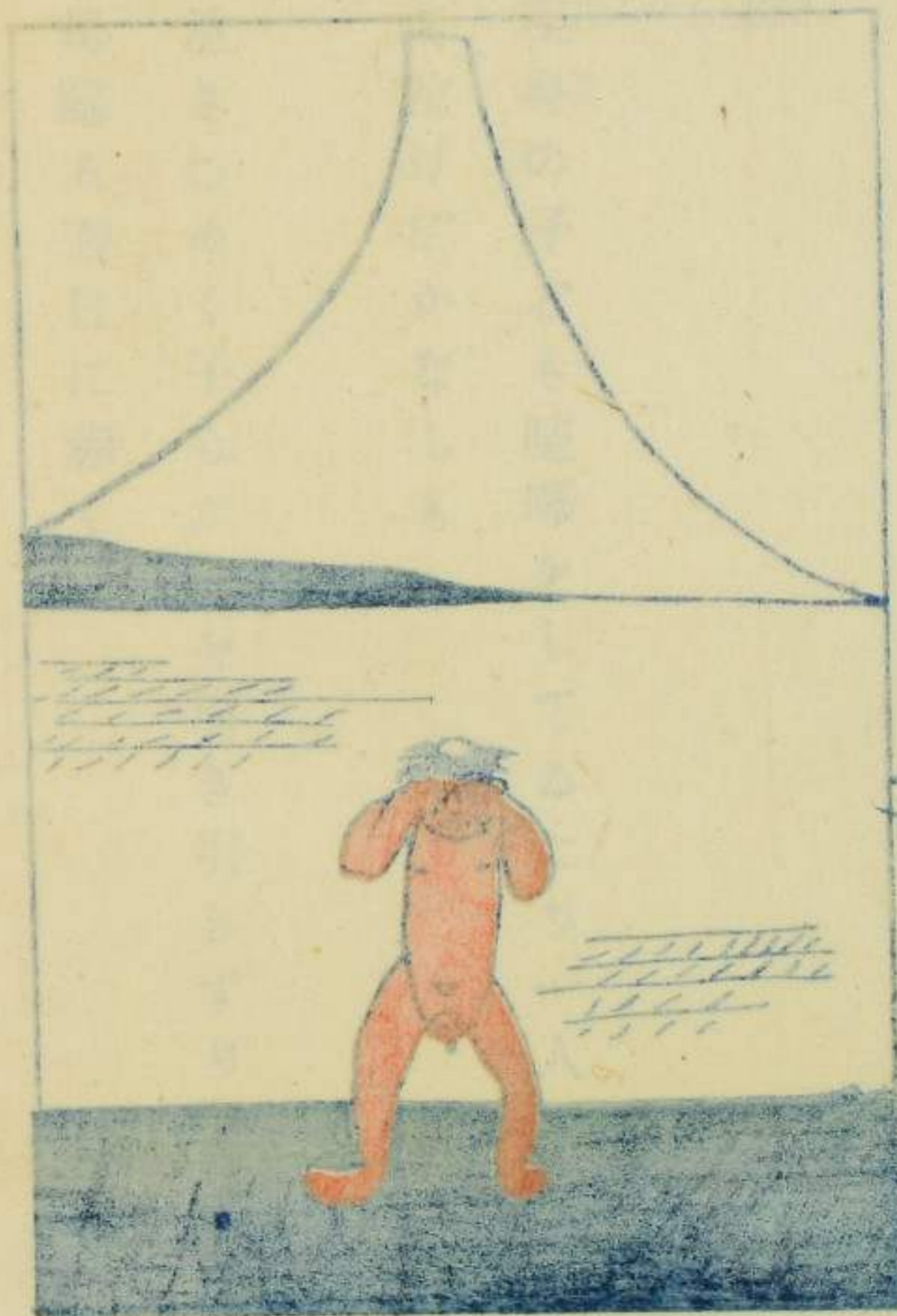
現身うつそみの子ども喧嘩けんかをしてゐたり一人打たれ
て泣けばかなしも

泣きわめく子らが手を引き引きずりてその
母歸る西日に赤く



何事の物のあはれを感じらむ大海の前に泣く童子あり

童子抄



大海たいかいの前に投げ出されて夕まぐれ童子わが
ごとくよく泣けるかも

ものなべて麗うらならぬはなきものをなにか
童の涙こぼせる

まんまろな朱あかの日輪空にありいまだいつく
し童があたま

この泣くは佛の童子泣くたびにあたまの髪
がよく光るかも

簪々とうねり來れども麗らなる波は童をと
 らへざりけり

麗らなれば童は泣くなりただ泣くなり大海
 の前に聲も惜しまず

麗らかに頭さらしてその童泣けばこの世が
 かなしくなるも

雪夜

この庵いほにまこと佛の坐まはすかと思ふけはひに
雪ふりいでぬ

冬青むかしの葉はに雪のふりつむ聲こゑすなりあはれな
るかも冬青むかしの青き葉

寂しさに堪へて吾が聴くしら雪の牡丹雪と
ぞなりにけるかも

澄み入りてわが身ひとつにふる雪のはては
音こそなかりけるかも

めづらかに人のものいふ聲ぞする思ふに空
も明けたるならむ

煌々くらうくらうと光さすかと思ふ法身佛といつな
りにけむ

見桃寺の鶏とら長鳴けりはるばるとそれにこた
ふるはいづこの鶏ぞ

雪後

よくも青く晴れし空かな思ひきや屋根のか
なたに涙おぼゆる

あかつきの雪に寂しくきらめくは木々に囀
る雀があたま

木の枝に雀一列ひとならびゐてひとつびとつに
ものいふあはれ

蘇鐵の葉八方に開くこの朝明雪しみじみと
 滲み滴りにけり

冬青の木も雪をゆすれり椎の木も雪をゆす
 れり寂しき朝明

魚さげてもものいふお作冬青の木の下にしま
 らく輝きにけれ

ほそぼそと雪後の煙立つるめり赤き煙突屋
 根の煙突

今は雪深くくづれてしとしとと庫裡くらの酢す甕がめ
に滲しみ滴たりにけり

馬の灸

生馬いきうまの灸きうすゑどころ見ゆるなり光あまねき
野のつ原はらの中うち

馬は馬頭觀世音なりはろばろに嘶いき來たれば
 悲しきものを

馬の頭をりをり光り大人おとなしく灸きうすゑられて
 ありにけるかも

現身うつしみの馬にて在ませば觀世音灸きうすゑられてあ
 りにけるかも

生馬の命かしこみ旃陀羅せんだらが火を點つけむとす
 空の高きに

あかあかと灸押しすゆる馬の腹馬はたまらず
 嘶きにけり

しみじみと馬に灸をすうる時馬かわゆしと
 思ひけるかも

おのれまた灸すゑられあるごとし馬のころ
 ろにいつなりにけむ

詮ずれば馬も佛の身なれども灸すゑられて
 嘶けばかなしも

不盡の雪

ひさかたの天に雪ふり不盡のやまけふ白妙
となりてけるかも

れいろうとして天にくまなきふじのやまけ
ふしろたへとなりてけるかも
うちいでて人の見たりけむ不盡のやまけふ
白妙となりてけるかも

龍膽抄

かきわくるひと足ごとに龍膽りんだうの光りまたたく冬ふゆのあきあけ

犬いぬを連れてゆけばかはゆき小笹原こささそこにも龍膽りんだうここにも龍膽

そこにもここにもあはれな小さい龍膽りんだうが咲いてある光つてまたたいてある

犬の眼も幽かに動く龍膽の花のいのちを見
守るらしも

龍膽を久に凝視めし眼を深く心に向けつそ
こにも龍膽

龍膽が頭の中に光るなりたつたひとつの龍
膽の花

麗々と足を洗へば龍膽の光りこぼるる心地
こそすれ

三崎遺抄

相模のや三浦三崎は誰びとも不盡ふじんを忘れて
仰がぬところ

相模のや三浦三崎は目の前に城ヶ島じやうとふ島
あるところ

相模のや三浦三崎は大まかに惠美須三郎鯛
釣るところ

相模のや三浦三崎は燕の繪を湯屋の廂ひさしに畫ゑが
けるところ

相模のや三浦三崎は屁の神を赤き旗立て祭
れるところ

相模のや三浦三崎はありがたく一年ひととせあまり
も吾が居しところ

相模のや三浦三崎の事思おもへばけふも涙のな
がれながるる

雲母集餘言

一心敬禮して此雲母集一卷を世に公にせむとするに當り、今更に覺ゆるは度ましい懺悔の涙である。一入にまた痛ましきは切々として新あらたなる流離の悲みである。光悦身に餘りながら私はなほ自身の救ふ可らざる痴愚を感じる。私は少くとも不純であつた。今こそ私は目醒めて茲に謙讓の筆を執る、眞實は私の所念である。

I 本集は大正二年五月より三年二月に至る、相州三浦三崎に於ける私の

II

さうやかな生活の所産である。この約九ヶ月間の田園生活は、極めて短日月であつたが、私に取つては私の生涯中最も重要な一轉機を劃したものだと思ふ。初めて心靈が甦り、新生是より創まつたのである。

相州の三浦三崎は三浦半島の尖端に在つて、遙かに房州の館山をのぞみ、兩々相對して、而も貴重なる東京灣口を掩してゐる、風光明媚の一漁村である。氣候溫和にして四時南風やはらかに、而も海は恍惚として常によろめいてゐる、さながら南以太利の沿岸を思はせる景勝の土地である。

私等の新居はこの三崎の向ヶ崎の濱にあつた。時俗呼んで今も向ヶ崎

の異人館と云ふのがそれである。この家はもと長崎の領事をしてゐた老佛蘭西人がその洋妾と暫らく隠棲してゐた一構で、當時はその洋妾の所有になつてゐたのである。西洋式の庭は海に面して廣く、一面に青芝が生へ、鍵形かぎなまりになつた石の胸壁の正面には石段があり、棧橋があり、下には一艘の短艇ボートが波にゆられてゐた。家屋は日本風であるが海に向つて開いた玄関、廊下、翼家はなれの欄間には流石に紅や黄の窓硝子が箝はめられ、庭の隅々にはまた紅い松葉菊を咲かしてあるといふ風に、如何にも異國趣味の瀟洒な住宅であつた。海は又どの室からも見えた。而して前には城ヶ島の緑が横たはり、通り矢とその間の五丁にも足らぬ海峡を小蒸汽が來、渡海船が通り、餘多の漁舟が漕ぎつれて行く、而して遠くは煙霞の間に

III

IV

房州の山をのぞみ、歐洲航路の汽船軍艦はいつも煙を曳いてこの眺望の中を消えて行つたなど、全く明快な近代劇の舞臺面であつた。

此處に私の一家は可なり贅澤な、然し寂しい生活をした。

向ヶ崎の異人館生活は五月より十月迄引續いた。その間、父と弟とは遊び半分、殆ど夢見るやうな氣持で、場所の有利なのを幸に、土地の漁船より新鮮な魚類を買ひ占めて東京の魚河岸に送る商買をはじめた。私は全く與らなかつたけれども、時折短艇に鯖や鯖やを載せて町の市場迄届けに行つたりした。夏帽子にホワイトシャツをつけ、黒い大きなネクタイをふつさりと結んだこの魚屋の短艇を見た時に土地の人は如何に驚

いたであらう。この仕事は結局失敗に終つた。而して昔の九州の古問屋としての華やかなロウマンズの百が一の効果も得なかつた事に就て私は何より父に氣の毒な感じを持つ。それやこれやで私たちの寂しい一家はまた都會の生活が戀しくなつて、秋が來るとすぐ東京に引上げて了つたのである。それで私だけは居残る事になり、二町谷の見桃寺(桃の御所)に移つた。而して翌年の二月、小笠原島に更に私が移住する迄の間、殆ど四ヶ月あまりの日月を、その寺の寂しい書院で靜かな度ましい生活をしてゐたのである。

此三崎生活の内容に就ては作品が凡てを證明すると思ふ故、これ以外何にも言はぬ。只初めは小兒のやうに歡喜に燃えてゐた心が次第に四方

V

VI

鬱悶の苦しみとなり、遂に豁然として一脈の法悦味を感じ得たと信ずる。それ迄の道程は、本集に於て初めより終まで殆正しい系統を追つて、順序よく採録されてある。それを見て頂けば何よりである。

一旦東京を遠離してから、私の生活は一變した。地上に湧き上る新鮮な野菜や潑刺と鱗を翻す海の魚族は私の眞實の伴侶であつた。従て、私は短艇を漕ぎ、魚介を漁り、山野を駆け廻る以外、當時に於ては、何ひとつ讀みもしなければ、又殆ど創作する暇も無かつたと云つていい。ただ異人館時代に於て眞珠抄の短唱數十首と、見桃寺に移つてから山海經、地面と野菜、閻魔の反射、法悦三品中の、それぞれその一部だけを得た

のみである。その他は小笠原島や東京に歸つてから、幸に感興の再現を得て、筆を執つたものである。それでそれらの歌風に就ても非常に複雑してゐる。これだけは承知していただきたい。尙、此の三崎新居以前事情があつて、十日ばかり同處へ逗留してゐた事がある。「流離抄」の一篇はその時の歌である。

尙、三崎に關しては是等の歌以外私はまだ數十の詩篇を有つ。右は後日を期し、更に此の姉妹集として公にする計畫である。

VII

又曰ふ。此の中の四枚の挿畫は一年前に畫いて置いたものである。今

から見れば極めて拙く、加ふるに木版師の手にわたる際に、一寸宛寸法を縮め過ぎた爲め、あまりに小さな畫になつたのは残念である。

兎に角此の雲母集一卷は純然たる三崎歌集である。而してこれらの歌が全く自分のものであり、私の信念が又、眞實に自分の心の底から燦めき出したものに相違ないといふ事は、自分ながらただただ難有く感謝してゐる。自分を救ふものは矢張自分自身である。

滴るものは日のしづく、静かにたまる目の涙

大正四年八月

著 者 識

雲母集畢

大正四年八月七日印刷
大正四年八月十二日發行

定價金壹圓五拾錢

著作權
所有

著作
北原白秋
發行
北原鐵雄
印刷者
淺野榮
印刷所
東京市芝區愛宕町三丁目二番地
東洋印刷株式會社

發行所
發賣所

東京市麻布區坂下町十三番地
阿蘭陀書房
東京市神田區表神保町三番地
振替東京一四四八九番
會社
東京堂書店
振替東京二七〇番

